2016年の夏休み

館長　廣瀬　信一

夏休み期間恒例となり、定着してまいりましたイベント「野球で自由研究！」のご報告をいたします。当館のミッションである、「つなげる」「ひろげる」「たたえる」の中の「ひろげる」をテーマに今夏も様々な企画を行いました。

「野球で自由研究！」では、野球をテーマに自由研究を行いたいがどんな資料を見たらいいか、どんな内容がいいかなどの相談にのり、アドバイスをしました。その結果、過去最高の540人もの小・中学生が来館し取り組んでくれました。また、テーマのヒントになる「ミニミニ実験コーナー」を１日２回、ほぼ毎日それぞれ約30分、企画展示室で行いました。当館職員による実験や説明に真剣に耳を傾け、メモを取る子供たちの姿が印象的でした。

次に、元NPBセ･リーグ記録部長の石井 重夫さんを講師に、７月27日（２回）、８月４日に「野球が100倍楽しくなる 野球の記録をつけてみよう！」のイベントを開催いたしました。今回は、初めてスコアをつける子供たちを対象とすることを前提に、基礎的な内容でお願いしました。また、保護者を含めて40人を定員とし、事前予約制にしたところ問合せが多く、石井さんにもご協力いただき、最終的には都合３回開催いたしました。実際の試合の映像を見ながら、スコアをつけることで、野球に対する興味がさらに増したと思います。

８月６日と12日に開催しました「夏休み審判学校！」も、夏休みの人気イベントとして定着してきました。今回は、「記録」同様、場所はイベントホールを使用しました。プロ野球審判員の講師の方々も例年より多く出演していただき、さらにパワーアップした内容となりました。

８月22日の「親子グラブ製作教室」は、小学生とお父さん、お母さんが力を併せて世界で一つのグラブを作るという大変夢のあるイベントで、全国から例年の倍以上の応募がありました。

23日、24日の「バット製作実演」は、巨人戦開催日とも重なり各回とも多くの子供たちで賑わいました。実際のクラフトマンの仕事の一端を経験することができ、良い思い出となったと思います。

これらのイベントを通じ、野球の楽しさ、面白さを子供たちに紹介できたことは、私たち博物館が掲げるミッションにつながるものと思います。

終わりに、イベント開催にあたり多大なご協力をいただきました、関係各位・法人・企業様に対して紙面を借りて厚くお礼申し上げます。

（詳しくは２－３面をご覧ください。）

「第１回野球で自由研究！コンテスト」開催

「在り方検討委員会報告書」の中で、当館の取り組むべき事項の一つに「教育・普及活動の強化」があり、また当館の評議員会でも野球をテーマにしたコンテストの提案がありました。そこで、教育関係の方々に自由研究の現状のヒアリングを行い、「第１回野球で自由研究！コンテスト」を開催することといたしました。ご応募いただきました皆さまには感謝申し上げます。10月29日㈯に当館ホームページ上で最優秀賞、優秀賞の作品を公開する予定です。また、次号のニュースレターでは、審査結果並びに表彰式についてご報告いたします。

2016年 夏休みイベント「野球で自由研究！」報告

今年も夏休み期間の７月21日㈭～８月31日㈬までの42日間、館内の図書室、企画展示室、イベントホール、野球殿堂ホールで、野球をテーマに自由研究を行う小・中学生をサポートする「野球で自由研究！」を開催しました。

企画展示室

「野球で自由研究！」の申込者は過去最高の540人となりました。昨年はポスター、チラシを文京区の小・中学校などを中心に配布しましたが、今年は範囲を広げ、近隣区の小・中学校や首都圏の本拠地球場などでも配布した結果、昨年に比べて199人の増加となりました。

学年別では、小学校３年生が112人で20.7％となり、昨年の52人（15.2％）から倍以上の人数となりました。

小学校４年生、５年生、６年生がそれぞれ120人、125人、103人で、３年生から６年生の４学年の合計は460人となり全体の85.2％を占め、自由研究を行う学年は、この４学年が中心となっています。

テーマ別では、野球用具をテーマに選ぶ子どもたちは322人で、全体の59.6％を占め、昨年の49％を大きく上回りました。中でもグラブについて調べる子供が113人で全体の21％を占め、昨年の34人で10％に比べ、大幅に増加しました。

	人数	割合
小学校１年	24	4.4%
小学校２年	26	4.8%
小学校３年	112	20.7%
小学校４年	120	22.2%
小学校５年	125	23.1%
小学校６年	103	19.1%
中学校１年	14	2.6%
中学校２年	8	1.5%
中学校３年	2	0.4%
そ の 他	6	1.1%

自由研究テーマ別内訳　※複数回答あり

	歴史	用具					変化球	野球場	高校野球	記録	その他
		用具全体	ボール	グラブ	バット	ユニホーム					
小１年		3	3	5	8			1			4
小２年	1			9	7		1			1	5
小３年	30	6	17	24	5	2	2	5			17
小４年	24	9	14	22	23		4	1	1	2	22
小５年	18	3	28	20	31	4	7	3	2	2	14
小６年	26	5	17	25	13	4	4	3			11
中１年	4		1	3	1	1	1				2
中２年		1	1	2			1				3
中３年	2										
その他		1	1	3							
合計	105	28	82	113	88	11	20	13	3	5	78

ミニミニ実験コーナー

開催日：７月21日～８月31日（当館でイベントのある日は除く）

企画展示室にて、14時～・15時～の２回、それぞれ約30分行いました。

子供たちは、昨年トリプルスリーを達成したスワローズの山田 哲人選手とホークスの柳田 悠岐選手のバットの長さや重さを測ったり、侍ジャパンの大谷 翔平選手のユニホームを着るなど、プロ野球選手の用具の大きさや重さを体験しました。

14時～

①変化球のひみつ

風船や紙筒を使って、回転して変化するボールの基本的な原理を説明。

②ユニホームのひみつ

ユニホームの素材などの話をし、大谷 翔平選手のユニホームを着て軽さや大きさを体験。

大谷選手のユニホームの大きさを体験

15時～

①グラブのひみつ

明治時代（レプリカ）、昭和初期（レプリカ）のグラブと現在のグラブを比較。

②バットのひみつ

バットのルール説明。柳田選手、山田選手のバットの長さや重さを体験。

柳田選手のバットの太さを測る

山田選手のバットの重さを体験

野球が100倍楽しくなる 野球の記録をつけてみよう！

日時：2016年７月27日㈬ 10:30～（追加）、14:00～、
８月４日㈭ 14:00～（追加）
講師：元NPB セ・リーグ記録部長 石井 重夫 氏

今回は事前予約制にしたところ、応募者が多く２回追加講演を行いました。
参加者131名の内、70名が小・中学生でした。子供たちは「早稲田式」の記録の付け方の説明を聞いた後、試合の映像を見ながら、１球ごとに“映像をみて、スコアを書く”を繰り返し、記録をつけていました。“本物”のプロ野球の記録員からつけ方を教えてもらい、野球の新しい見方が増えたのではないでしょうか。

夏休み審判学校！

日時：2016年８月６日㈯ 14:30～16:00、12日㈮ 14:30～16:00　　協力：一般社団法人 日本野球機構
講師：野球規則委員、前NPB審判長 井野 修 氏、NPB審判長 友寄 正人 氏、
審判技術委員 山﨑 夏生 氏、審判技術委員 渡田 均 氏、
審判技術委員 平林 岳 氏（12日のみ）、審判技術委員 栄村 孝康 氏

子供たちは“本物”のプロ野球審判員から直接話を聞いたり、迫力あるコールの声に驚いたり、審判員の用具に触れたりしました。また、ストライク、ボール、アウト、セーフのジャッジを教わり、実際にジャッジをするなど貴重な体験をしました。“先生”の話を聞きながらメモを取り、写真を撮るなど、真剣に“授業”を受けていました。子供たちにとって“本物”の審判員を体験するまたとない機会になりました。

親子グラブ製作教室

日時：2016年８月22日㈪ 13:30～　　協力：ミズノ株式会社

今年は例年の倍以上となる、209通の応募があり、この中から抽選で選ばれた14組28名の親子が参加しました。
当日はミズノ社スタッフ３氏のご指導のもと、約２時間かけてひも通しの作業を行いました。
メモをとったり、写真を撮ったりしながら作業をする親子が多く、２人で力を合わせ自作グラブを完成させました。最後に出来上がったグラブを手に集合写真を撮り、大事そうにグラブをお持ち帰りになりました。

バット製作実演

期日：2016年８月23日㈫、24日㈬　　協力：ミズノ株式会社
時間：11:00～12:00、13:30～14:30、15:00～16:00

本年も渡邉 孝博クラフトマンに、１日３回、各１時間の実演を行っていただきました。各回とも開始前から席が埋まる状況で、例年以上にメモやカメラを手にした子供たちが熱心に見学していました。渡邉クラフトマンには、原料の木材やバット製作の工程についてのお話、バット製作の実演、紙やすりかけ体験（小学生３～４名限定）を実施していただきました。また質疑応答コーナーでは、自由研究目的の子供たちや野球ファンの方から沢山の質問があがり、１つ１つ丁寧にお答えいただきました。

アメリカ視察報告

事業部長　筆谷　敏正

本年は、主任学芸員の関口 貴広と私の二人に、アメリカの野球殿堂博物館や各球場の他、博物館や美術館を視察する機会を与えていただきました。当館の職員がアメリカに出張するのは、２年振りのこととなります。行程は、９月18日に成田を発ち、ニューヨークに２泊、クーパーズタウンに２泊、マイアミに１泊、ロサンゼルスに１泊の後、９月25日に成田に戻ってくるといったものでした。

米国野球殿堂博物館 (NATIONAL BASEBALL HALL OF FAME AND MUSEUM) 訪問

９月20日朝、ニューヨークに宿泊していた私たちは、アムトラック（鉄道）で、オールバニーに向かい、そこでレンタカーを借りて２時間弱で、アメリカの野球殿堂博物館のあるクーパーズタウンという街に到着しました。鉄道の大幅な遅れもあり、博物館に到着した時には、この時期の閉館時刻である17時まで、１時間程度しかなかったので、私は翌日のアメリカの博物館のスタッフとのミーティングに備えて、３階建ての建物内の広大なスペースの展示等を、ざっと拝見させていただきました。

翌21日には、展示とコレクション担当の副館長であるストロール氏、学芸員のシーバー氏、図書館担当のゲイツ氏、コレクション担当のマッカイ氏、展示・デザイン担当のクイン氏の５氏にお集まりいただき、展示や組織等について、１時間強お話を伺いました。中でも、ベーブ・ルースの着用ユニホームの展示には、実際のルースの身体を再現して展示するために、マネキンを加工している等のお話には、大変感心いたしました。

野球殿堂博物館１階にある野球殿堂ホール
今年までに312名が殿堂入り

ミーティング終了後、ストロール氏により、コレクションの収蔵庫を中心としたバックヤードや「リサーチセンター」と呼ばれる図書館等をご案内いただきました。写真やフィルムを保管している収蔵庫の低温での空調管理や、非常に広く感じたバットやグラブ等の野球道具の収蔵庫の整理整頓された様子には、ただただ感服するよりほかありませんでした。

その後、アイドルソン館長、ストロール氏、シーバー氏と昼食をご一緒して歓談させていただきました。総じてアメリカの博物館は、規模・内容ともに、日本とは比較にならないほど素晴らしいものの、博物館や図書館の機能の本質的な部分では、参考になる点も多く、今後とも、アメリカのスタッフの皆さんと良好な関係を維持し、学ばせていただきたいという気持ちが強くなりました。

ベーブ・ルースのコーナー
マネキンでルースの身体を再現!?

野球殿堂博物館の入口前にて
左から、アイドルソン氏、シーバー氏、筆谷、ストロール氏、関口

昼食後は、博物館の閉館時刻まで、ただひたすら展示を見続けました。2015年11月に２階にオープンした「WHOLE NEW BALLGAME」のコーナーでは、1970年代から今日までの球界のトピックスを、様々な映像や写真・実物等を用いて紹介しています。ここでは、タッチ式の大型スクリーンを４か所に設置、この時代の球界のハイライトが上映されるシステムとなっており、映像を巧みに利用している点は、大変参考になりました。

それにしても全館での展示の圧倒的なボリュームに、十分満足に見学できたとはとてもいえず、もう一度訪問したいと思いつつ、博物館を後にしました。博物館を楽しむためには、クーパーズタウンには１泊以上宿泊して、十分な時間を確保することが不可欠だと思いました。

マイアミ・マーリンズの本拠地マーリンズ・パーク等の球場を訪問

ご寄贈頂いたユニホームをお持ちのロイエロー氏と筆谷

日本式の「感謝状」贈呈に、笑顔をみせるイチロー選手

９月22日早朝４時30分にクーパーズタウンを発ち、オールバニー国際空港から、シャーロット経由で、空路マイアミへ向かいました。

マーリンズ・パークには16時すぎに到着し、マーリンズ球団のロイエロー副社長に、グラウンドに案内していただきました。その際、思いがけず、副社長より、イチロー選手がメジャー通算3000安打達成試合で着用していたユニホームを手渡され、当館にご寄贈いただく旨のお話があり、大変感激いたしました。尚、このユニホームは、関口が手荷物で持ち帰り、帰国の翌営業日である９月27日から館内で展示しております。

また、イチロー選手からは、かねてより、ユニホーム等様々な品物を、当館にご寄贈いただいており、感謝の気持ちをお伝えしたいと考えておりました。このたびマーリンズ球団のご協力により、当日の試合前の守備練習終了後、球場のダッグアウト内で、日本から持参した「感謝状」を、イチロー選手に直接お渡しすることができました。日本式の「感謝状」を、笑顔で受け取っていただきました。

今回の出張では、マーリンズ・パークの他、ニューヨーク・メッツの本拠地シティ・フィールドとロサンゼルス・ドジャースの本拠地ドジャー・スタジアム（ドジャース球団の佐藤 弥生さんにご案内いただきました）を視察し、野球の試合も観戦することができました。また、ニューヨーク・ヤンキースの本拠地ヤンキー・スタジアムでは、私たちの出張期間中には、野球の試合の開催はありませんでしたが、ヤンキース球団学芸員のリチャーズ氏に、球場内の博物館等を、特別にご案内いただきました。

その他、一般の博物館や美術館もいくつか視察させていただきましたが、今回の視察で得た知識を、今後の博物館運営に役立てていきたいと思います。

イチロー選手のメジャー通算3000安打達成試合で着用していたユニホームをはじめ、過去にご寄贈頂いたユニホーム等を、現在、館内にて展示中！

殿堂入りの人々を語る(53)

西村　幸生氏

球　縁

ジョイス津野田 幸子（1977年野球殿堂入り　西村 幸生氏長女）

私の父西村 幸生は関西大学野球部を卒業後、昭和11（1936）年当時の大阪タイガースに入団、直ちに主戦投手として、巨人の沢村 栄治、スタルヒン両投手と投げ合い２年連続タイガースの優勝に貢献する事が出来ました。後日、「初代巨人キラー」との評価を頂き、同郷の沢村投手と共に黎明期の阪神巨人戦を盛り上げたと伝えられています。

昭和15（1940）年満州に渡りノンプロ満州電電でプレーした後、昭和19（1944）年３月応召、翌年４月にフィリピン戦線で戦火に倒れ僅か34年の生涯を閉じたのでした。

昨年１月、関西大学野球部創立百周年記念式典にお招き頂いた際、思いがけず父の英語の署名入りサイン帳のコピーを頂き大変驚きました。父が関大野球部の主将兼投手として昭和11（1936）年２回目のハワイ遠征に出かけた際、現地でバットボーイを買って出た「コイデサブロウ」少年にチームから贈られたサイン帳の一部との説明を受けました。

早速「コイデ」さんの消息を尋ねた結果、医学博士として引退後ニューヨーク州にご健在との事。お目にかかる前に電話したところ79年前の関大野球部ハワイ遠征当時の記憶を辿り、父の活躍ぶりや一塁手兼リリーフ投手岡本 利之選手、そして野手についても詳しく話して頂き、学生時代の父の面影を偲び感動致しました。

コイデ博士のお話から、母が生前岡本 利之さんの著書『白球と共に』を頂いていた事を思い出し読み返したところ、関大野球部僚友としてのエピソード、ハワイ遠征、戦雲漂う満州での遭遇と別れなど、父を生涯の親友として絆を強く描いて頂き大変感激しました。

又、昨年の夏には我家の菩提寺の駒形ご住職から突然小包が届きました。中にはハワイの球場の赤土に染まった３個のボールが入っていました。そのボールには関大野球部がハワイ遠征した時に対戦したオアフ製糖会社チームとの対戦スコア６対０と書かれ、更に「1936年西村ゆきお」と署名されていました。色褪せた他のボールには関大遠征チームメンバーの署名が読み取れる事も判明しました。

駒形ご住職によると、私からお伝えしていた関大野球部のハワイ遠征とコイデ少年についてお寺の集会で話したところ、偶然にもダグラス・コイデという檀家の方から、長兄サブロウ氏から預かったボールが長年自宅に飾ってあるので、出来たら関係者に届けて欲しいと申し出られたそうです。関大ハワイ遠征当時12歳のサブロウ少年が記念に受け取った３個のボールは関大野球部員の魂のボールとして戦前・戦中・戦後とハワイのコイデ家に80年に及ぶ「ホームステイ」をしていた事になります。そのボールが終戦70年、父の没後70年に私の元に奇しくも「里帰り」したものと考えると感無量となりました。

早速関大野球倶楽部事務局の木田 勝也様のご厚意により野球部創部百周年記念展に展示して頂きました。更に『白球と共に』の著者で父の親友岡本 利之さんのご長女衣笠 協子さんとも連絡が取れ、揃って展示会を参観する事が出来ました。野球人生を謳歌した２人の父親で「球友」が、ハワイ遠征中渾身の力を込めて投げ合ったボールを目の前にして２人でしばし無言の時を過ごしました。

関大での展示会終了後には、野球殿堂博物館の廣瀬 信一館長はじめ職員の方々のご好意により３個の「里帰り」ボールを寄贈させて頂きました。

去る６月16日、父のレリーフ前で白い手袋をはめ３個のボールを展示ケースに入れた時、たった１枚の戦死報告書以外には遺骨も遺品もない父にとって、この３個のボールは野球に情熱を注いだ青春の証としてかけがえのない誇りになるものと確信致しました。

戦争により、多くのプロ野球選手が道半ばにして命を絶たれました。父もその一人として太く短い人生を自ら鼓舞して懸命に生きたと思います。野球殿堂博物館で見せて頂いた往年の父の投球フォームの映像からその気迫を感じ取る事が出来ました。

平成24（2012）年、私は幸運にも阪神タイガース四藤 慶一郎専務（現阪神球団社長）のご厚意により、父と同じ背番号⑲をつけている藤浪 晋太郎投手を直接激励する機会を得ました。その際、中村 博男様の著書『初代巨人キラー』を手渡し、若虎の代表として父同様果敢に攻めの野球に徹し、平和な時代に野球の出来る幸せを大切にする様肩入れ致しました。

ここ２，３年を振り返ると実に不思議なご縁と皆様方のご親切により感銘深い経験をさせて頂いており、心より感謝申し上げます。

日米を問わず若い世代の人達も是非野球殿堂博物館に足を運び、野球人生に賭けた先人達の功績を学びそして「つなげる」「ひろげる」「たたえる」ことにより有意義な人生を送って欲しいと切に願っております。

プロ野球12球団デー

北海道日本ハムファイターズ

8月30日
31日
9月1日

8月31日にはB･Bが来館。たまべエと館内を見学しました。

中日ドラゴンズ

9月2日
3日
9月4日

9月4日にはドアラとたまべエが来館しました。

野球殿堂博物館 トピックス（2016年8月～10月）

斎藤 雅樹氏（2016HOF）が来館！

8月17日㈬、本年殿堂入りの斎藤 雅樹氏が来館し、「野球殿堂入り特別展」をご見学されました。
また、9月20日㈫にはご家族とごいっしょに来館されました。

長曽根ストロングス来館！

8月20日㈯、高円宮賜杯 第36回全日本学童軟式野球大会 マクドナルド・トーナメントで、大会最多となる6度目の優勝を果たした長曽根ストロングス（大阪）の6年生が来館しました。

榎本 喜八氏（2016HOF）のご家族来館！

9月4日㈰、本年殿堂入りの榎本喜八氏のご家族が来館されました。

博物館からのお知らせ

▶異動

監事の交代
［新任］石井 一夫氏（読売新聞東京本社 取締役事業局長）
［退任］河田 卓司氏

▶次回企画展のお知らせ

・「第1回野球で自由研究！コンテスト」作品展
…10月29日㈯～11月6日㈰
・「日本野球ポスター展 2016」…11月10日㈭～12月11日㈰

▶販売中

●野球守 2016　　価格 800円（税込）

応援しているチームへのプレゼントにいかがですか？
まとめての配送も承っております。
・野球守 10体まで　御守代金＋送料100円
・野球守 20体まで　御守代金＋送料200円
20体以上ご希望の方はお問い合せ下さい。

●編集後記　紙面の都合上「知ってほしいこんな資料（もの）」「こんにちは図書室です」「コラム博覧/博楽」は休載します。

博物館のご案内

場　所　東京ドーム21ゲート右
開館時間　3月1日～9月30日　AM10時～PM6時
10月1日～2月末日　AM10時～PM5時
（入館は閉館の30分前まで）
入館料　大人　600円（500円）
高・大学生　400円
小・中学生　200円（150円）
65歳以上　400円
（　）は20名以上の団体
休館日　月曜日
（祝日、東京ドームでの野球開催日、春･夏休み中は開館）
年末・年始（12月29日～1月1日）

《11月・12月・1月の休館日》
11月　7日・14日・21日・28日
12月　5日・12日・19日・26日・29日・30日・31日
1月　1日・16日・23日・30日

野球殿堂博物館 Newsletter 第26巻 第3号
2016年10月25日発行（年4回発行）
編集・発行　公益財団法人 野球殿堂博物館
（旧･財団法人 野球体育博物館）
〒112－0004　東京都文京区後楽1－3－61
Tel 03（3811）3600　Fax 03（3811）5369
http://www.baseball-museum.or.jp/

リレー随筆(65)

25年ぶりに針が進んだ

競技者表彰委員会委員　　木村　雅俊（中国新聞社）

25年ぶりの歓喜を間近で見たからか、今季は順位予想の難解さをあらためて痛感した。プロ野球を知り尽くした評論家や解説者、さらに各球団の担当記者も含め、「広島優勝」の結果を的中させた人がどれほどいただろう。広島だけを追う中国新聞の担当たちの予想も当然のように大多数の外れ組だった。

「混戦になれば、広島の優勝もある」。それがひいき目に見ても精いっぱい。裏を返せば、混戦しかチャンスはないと言っていたようなものだ。

結果は、ご承知の通り。シーズン89勝、貯金37、２位に17.5ゲーム差など、全て球団新記録の独走Ｖとなった。さらにチームでは30年ぶりに、セ５球団に全て勝ち越す「完全優勝」のおまけ付きである。

開幕前に言われていた、前田 健太が抜けて投手力が落ちたという戦力分析は大外れ。２位とのゲーム差が広がり始めた６月に、優勝を唱える声も大きくなり始めた。しかし、原稿や紙面上では「NGワード」のように扱い、20年ぶりの貯金20に到達した時も懐疑的だった。

４月に新井 貴浩が2000安打、７月には黒田 博樹が日米通算200勝を達成。それぞれがチームを一つにしていく節目となったが、2000安打と200勝が同じチームから同一シーズンに達成されたのは史上３度目。過去２度は優勝していないというデータも足かせになっていた。

これほど後ろ向きなのは元来の性格に加え、全て1996年に11.5ゲーム差を巨人に逆転された、メークドラマのトラウマである。

あの年、私はカープ担当２年目。今でも当時のスコアブックを見返せば、最終盤の９月の試合内容が鮮明によみがえる。Ｖ逸はチーム内外に激しい落胆を与え、長い低迷期への入り口にもなった。野球の怖さも味わったがゆえに、「簡単に優勝できるはずがない」と決め付けていた。

広島の街にもそんな雰囲気があった。特に強い時代のカープを知り、昭和の風情が色濃く残る旧広島市民球場で観戦していた世代を中心に、慎重派が多かったように思う。

終わって見れば、昔を語りたがる世代の発想は全く当てはまらなかった。開場８年目のマツダスタジアムでは、まるで25年間ため込んだエネルギーを放出するかのような劇的な試合が繰り返された。８月下旬に25年ぶりの優勝マジック「20」が点灯。そこから、ほとんど足踏みすることなく14試合目で胴上げを迎えた。シーズン中に逆転勝ちが45試合もあるなど、想定外の勝ち方であった。

マツダスタジアムでは49勝20敗１分けと圧倒的な強さを発揮し、入場者は210万人を超えた。ファッションも重視したカープ女子といわれる若い世代を中心に、親子や祖父母と孫の観戦者も多数いた。そんなスタジアムに優勝への悲壮感や重々しい空気は生まれない。「マジックなんて初めてだから分からない」と口にする若い選手をさらに伸び伸びとプレーさせる要因にもなった。マツダスタジアムは野球観戦の概念を大きく変え、世代の針をようやく一つ動かした感がある。

独立採算のため、常に資金力が泣き所だった球団経営も一気に好転した。センターラインを中心に若手が主力を占めているチーム状況も加味し、気の早い評論家からは「黄金時代が到来する」という声も出ている。開幕前にあれほど低評価をしておきながらと思いつつ、今から当たらない来春の順位予想が気になって仕方ない。